

結果残したアベノミクス

今年の経済はどうだっただろうか、来年はどうなるだろうか。毎年年末になるとそんなことを考える。周りからも聞かれる。

この20年近く、あまり明るい気持ちにはなれなかった。それだけ日本経済の置かれた状況が厳しかった。しかし、2013年については、年初に予想していた以上によい年であったと感じている。日本経済が短期間にこれほど大きく好転したのは、本当に20年ぶりのことではないかと思う。アベノミクスについて、いろいろ

元重 伊藤 機構大教授 伊藤 元重 伊藤 元重

る批判する声はある。今後の展開についても不安視する声は小さくない。しかし、経済の結果は数字に出てくる。成長率、失業率、株価などどれをとっても、年初の多くの専門家が予想した数字よりもはるかに良い結果になっているのだ。では来年はどうだろうか。多くは「花火みたいなものだ」と。こつした悲観論に対して、私は

消費と投資が握る14年の経済

の人が気になるところだろう。13年の日本経済は、大胆な金融緩和策によって引く張られてきた。しかし、金融政策だけで経済が持続的に成長を続けていくわけではない。そこで、アベノミクスの第3の矢である「民間投資を喚起する成長戦略」に注目が集まる。

海外の投資家などで日本をシニカルに見ている人は、次のように言う。「どうせ日本は右壁のような規制を撤廃することはできないだろう。金融政策によって少し明るくなったように見えるが、所詮は花火みたいなものだ」と。

実際、14年の日本経済が順調に成長を続けていくための鍵は、国民の消費や企業による投資が握っている。消費や投資が出てこなければ、景気が持続的に好調を続けることは不可能であるのだ。よく言われるように、日本の家計や企業にお金がないわけではない。ただ、みな慎重になっており、消費や投資を抑えている。だから景気が低迷してきたのだ。

景気回復へ「気分」好転を 景気は気分の問題である、と言われる。結局のところ、国民や企業の気分が好転しないかぎり、景気も良くなることはないのだ。アベノミクスによる3本の矢も、そうした気分を好転させることに重要な鍵があるのだ。

幸いなことに、年末にかけて株価もだいぶ上昇を続けてきた。企業の業績も良くなっているところが増えている。来年の春闘に向けて、賃金がしっかりと上がるように、政府は労使との会議を続けてきた。こつした努力が賃金アップという形につながってほしい。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。